

児童養護施設入所児の遊戯療法における課題と対応

—愛着とメンタライジングの視点からの事例研究—

22424064 人見友佳子

主査教員 上地雄一郎

副査教員 桑原晴子・山本力

1. 問題と目的

現在、児童養護施設入所児童の約半数を被虐待児が占めており、虐待の種類は様々だが、ほとんどの子どもが、それぞれの課題を露呈している。そのため、最近では、臨床心理士を雇用し、施設内で心理療法を行う施設が増えている。虐待を受けた子どもにみられるプレイセラピーの中心的なテーマとして、西沢(1999)は、身体的虐待を受けた子どもでは、①安全性の確保の必要性、②愛着と攻撃性のアンビバレントな混在、③他者に対する不信感、④見捨てられ不安が特徴として見られると述べている。それに対し、木村(2009)は、ネグレクトを受けた子どものテーマとして、①不安や恐怖の表現、②連続性に対する期待の欠如、③依存性に対する拒否と攻撃、④絶望のテーマ、⑤愛着の再形成を挙げている。このことから、被虐待児の中でも、身体的虐待を受けた子どもと、ネグレクトを受けた子どもでは、プレイセラピーで出てくるテーマは質の違ったものになることが窺われる。さらに、児童相談所の被虐待分類でネグレクトに分類されている児童の中には、長期に渡って必要な養育が受けられずにいた上で保護された児童と、早期に保護され、乳児院で育ち措置変更されてきた児童がいるが、それぞれの抱える課題は違ったものになると考えられる。本研究では、後者の、ネグレクトを受けた子どもに焦点を当てる。

上で述べたような課題を持つ子どものプレイセラピーでは、セラピスト(以下 Th.と略記)から受けた温かい関わりを支えに愛着関係を安定させ、自分の中に良い他者・家族イメージを生み出そうとする作業をどう支え育てるかという視点、不安

定な愛着パターンをもつ児童が表現する愛着希求に気づき、適切に対応する Th.の関わりが重要になると思われる。そこで、そのような関わりを重視する「愛着とメンタライジングの視点」から、安定した愛着関係を経験していない子どもに対する介入を行い、その変化を考察する。

2. 方法

対象：筆者が非常勤で勤務している児童養護施設での担当ケースの中から、プレイセラピー開始時に幼児だった児童3名(表1)を対象とした。

※表1 研究対象児童 事例のため省略

手続き：X年のプレイセラピー開始時からX+1年3月頃までの経過をまとめ、愛着とメンタライジングの視点を導入して見立てと方針を設定し直した。そして、スーパービジョン(以下 SV)を受けながら上記の視点からプレイセラピーを実施した。それぞれのケースで、問題や疑問を感じた場面や重要な場面を抽出し、記録した。必要に応じてスーパーバイザーとともに、愛着とメンタライジングの視点から対応を考え直し、問題点を把握し、対応を改善し、応答を再構成した。修正した対応により変化した場面を取り上げ、Th.のどのような対応の変化が子どもの変化をもたらしたかを考察し、記録した。

3. 結果と考察

ここでは典型例として、B子の事例で検討することにする。

愛着とメンタライジングの視点からの見立てと方針：プレイセラピー全体を通して、「もういい」「嫌」と口癖のように強く言う、気を引こうと

してわざと Th. から離れようとするなど、「回避的な愛着スタイル」を持っていることが考えられた。Th. は、はじめのうち B 子の言うままに離れて見守るなどしていたが、“自分が離れても追いかけてもらえる”という体験、満たされない思いを Th. からプレイの構造の中で象徴的に満たしてもらう体験が重要であると気づいた。そこで、B 子の愛着希求に応え、B 子が満たされる経験を重ねることで、不安や自信のなさが減り、安心して生活ができるようになることを目的とした。

視点導入後の経過：駄々をこねる遊び：生活場面でのかんしゃくやしつこさは、プレイルームでは駄々をこねる遊びとして現れていた。うまくいかないことがあると Th. のせいにしたりぐずったりする。Th. は、B 子が納得できない思いを自分で収められるまでゆっくり付き添い、毎回、解決に向けた声掛けに加えて、メンタライジングの視点から B 子の感情や欲求を B 子が認識できるようにする「有標的ミラリング」を心がけた。そうすると、B 子は、気持ちが落ち着きやすくなり、新しいアイデアが浮かびやすくなった。**“帰りたい”遊び：**遊んでいる途中に「帰る（心理療法の時間を早めに終わる）」と言うので引き止めると嬉しそうにする。[本当はまだプレイルームで遊びたい気持ちがあるのでは…と B 子の気持ちに目を向けたことで、Th. は引き止めてみるという対応をすることができた。その結果、B 子の遊びは“帰りたい遊び”に変化し、何度も繰り返された。**素直な愛着：**自分のしてほしいことを素直に Th. に言葉で訴えてくるようになった。

視点導入前後の Th. の対応の変化とその効果：視点導入前の遊びでは、本児の回避的な愛着スタイルが、Th. の遊びに入ろうとする気持ちを抑えてしまっていたとも考えられ、Th. は、自分が傍観者ようになってしまう傾向があることに気が付いた。B 子が嫌がると思って Th. が抑えていた行動も、本当は B 子の求めているものであったことに気づき、本児の回避的な行動パターンへ介入することができた。また、Th. の中に“こうしてあげたい”という気持ちが起こってきた場合、以前は B 子に求められるまで行動に移さなかったが、それは B

子が求めているために起こってきた気持ちであることも考えられるため、そのことを意識したうえで行動に移してみるようにした。

その結果、B 子の行動は、Th. から離れて追いかけてもらう行動に移っていった。また、その行動を安心して繰り返したことで、求めても答えてもらえないかもしれないという不安が減少し、B 子は“落ちたからひろってほしい”など素直な形で満たされたい気持ちを Th. に表現できるようになったと思われる。

4. 総合考察

本研究では、ネグレクトを受けた子どものプレイセラピーの課題と対応について愛着とメンタライジングの視点から検討した。プレイセラピーでは、安定した愛着関係を経験していない児童が、Th. との関係の中で、自分の中に安定した愛着人物イメージを作り、育てていくことが重要であると考えられた。

視点導入の結果、クライアント（以下 Cl.）は、見守る—見守られる関係の中で、Th. との良好な愛着関係を築いていくことができた。Th. は、Cl. の気持ちを考えることで、B 子の愛着希求を“満たす”ことを意識し、回避的な愛着スタイルに介入することができた。また、安全基地としての Th. の役割を意識することで、Cl. の愛着行動を丁寧に扱えるようになったその結果、Cl. は怖いものに挑戦していくような遊びをも展開するようになった。3 事例とも、児童養護施設の事例研究に多い激しい攻撃性や援助構造の揺れについては扱っていない。しかし、Th. が Cl. の言葉や行動の意味を理解し、意識して丁寧に扱うようになったことにより、素直な愛着行動の増進や探索的な遊びの増加などがみられたことから、愛着とメンタライジングの視点の効果は大きかったと思われる。

<主要引用文献>

西澤哲(1999) トラウマの臨床心理学 金剛出版
木村恵理(2009). 日本における児童養護施設の心理療法担当職員の役割—現状と課題に関する文献的検討— PROCEEDINGS08 pp163-172.